

令和7（2025）年度9月「歳時記」

川と森の里、安芸太田に初秋の涼風が渡る9月。彼岸花が真紅の絨毯を描き、田では稲穂が頭を垂れ黄金色に輝きます。秋風に揺れる秋桜も美しい季節です。中秋の名月の夜には、団子や秋の果実を供え、ほんのりとした光に心を潤すことができます。彼岸を過ぎれば、野山は色づき始め、静かに秋が深まります。秋の夜長、本を傍らにゆったりと過去と未来に思いを馳せる時間が流れます。

そこで、今月は、秋の夜長、過去と未来を思う一時をとということで、「平家物語」と「徒然草」の冒頭を取り上げます。いずれも、中学校2年生の学習内容です。

1 平家物語（冒頭）

<古文>

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし、たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

<口語（現代語）訳>

祇園精舎の鐘の音には、全てのものは移り変わり同じ状態ではないことを伝える響きがある。沙羅双樹の花の色は、栄える者の必ず滅びゆく道理を表す。権力におごる人も長くは続かず、春の夢のようにはかない。武力ある者もまた、つひには消えうせること、ひとへに風に吹き飛ぶ塵のようなものだ。

2 徒然草（序段）

<古文>

つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

<口語（現代語）訳>

することがなく退屈であるのに任せて、一日中、硯に向かいながら、次々と浮かんでは消えていく、とりとめもないことを、何というあてもなく書きつけていると、妙に心騒ぎがすることである。

「平家物語」は、平家一門の興亡のありさまを語った軍記物語です。成立は鎌倉時代の始めで、作者は信濃前司行長といわれますが、はっきりしていません。漢語を巧みに交えた文章には独特の調子とリズムがあり、琵琶法師の語る「平曲（平家琵琶）」として広く民衆に親しまれました。

「徒然草」は、鎌倉時代の末に、兼好法師によって書かれた、「枕草子」と並び日本の代表的な随筆文学です。自然や人間についての鋭い考えや感想、見聞が書きつづられ、無常観に基づく人生観や美意識が読み取れます。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい
* 練習問題

- 波下線部「盛者必衰」と同じ内容を表している部分を、これより後の古文中から二つ抜き出しましょう。
 - 波下線部「春の夜の夢」と同じように、はかないもののたとえとして使われている言葉を、古文中から抜き出しましょう。
 - 波下線部「そこはかたなく書きつくれたば」とありますが、何を書きつけているのですか。古文中から抜き出しましょう。
 - 徒然草序段で、作者はどのようなことを述べていますか。次の空欄に入る言葉を下から選んで書きましょう。
「徒然草」を書いている時の（ ）。
- じょうきょう しんじょう もくてき てんぼう はんせいてん かいせつ
状況と心情 目的と展望 反省点と解説

かいどうれい
< 解答例 >

- おごれる人も久しからず たけき者もつひには滅びぬ
- 風の前の塵
- 心にうつりゆくよしなし事
- 状況と心情